

# カトマンドゥ盆地の仏教写本および版本について

山口 しのぶ\*

## 1 はじめに

ネパール、カトマンドゥ盆地に古くから住み、チベット・ビルマ語系のネワール語を母語とするネワール人たちの間には、インドから伝えられた仏教が残っており、これらは「ネワール仏教」(Newar Buddhism)と呼ばれる。すでに5世紀にはカトマンドゥ盆地には仏教が伝えられていたといわれるが、13世紀初頭にインドで仏教が滅びるまでに、ネワール仏教は数多くのサンスクリット仏典をインドから輸入した。インドで仏教が滅んだ後は、新しいテキストが入ることが無くなり、ネワール人たちの編纂によるサンスクリットの、あるいはサンスクリットとネワール語の混在するいわゆるローカル・テキストが作られるようになった。

これらのテキストの写本が、現在カトマンドゥ盆地には数多く存在する。また20世紀後半以降、これらの写本をもとにしてサンスクリット、ネワール語のテキストがネワール仏教僧たちによって出版されてきた。本報告では、サンスクリット写本の保存に関して、カトマンドゥ市タメル地区にある民間の古文書館「アーシャー・サファー・クティ」Āśā Saphū Kuthi (Archives)の最近の動向、および個人宅で保管される写本について述べる。またネワール仏教僧たちの手になるサンスクリット・ネワール語の仏教儀礼テキストの版本について、それらが現在ネワール仏教で果たす役割を中心に述べていきたい。

## 2 アーシャー・サファー・クティの活動

カトマンドゥ盆地で書写されたことが確認できる写本は、10世紀にあらわれ、20世紀まで仏典が書写されてきた(田中・吉崎 1998: 86)。ネパール国内において写本は、国公立図書館、寺院、個人等が所蔵しており、ドイツの協力でそれらの一部はマイクロフィルム化され、ネパール国立公文書館 National Archives がフィルムを保管している。公文書館に依頼すれば、有料でマイクロフィルムの複製を入手することが可能である。ネパールの写本の保存プロジェクトに関しては、(田中 1990)(田中・吉崎 1998)に詳しく述べられている。

国公立ではなく、写本を保存する民間の機関に「アーシャー・サファー・クティ」が

---

\*研究協力者: 中京女子大学人文学部・助教授

ある。「サフー・クティ」とはネワール語で「図書館」を意味するが、この機関は主にサンスクリット、ネワール語の写本を所蔵し、厳密には古文書館と呼ばれるべきである。アーシャー・サフー・クティは、「チョサ・パサ」(cvasā pasah)と呼ばれるネワール人文芸家、知識人の団体の管理のもと、1987年に開館した。

この古文書館の写本コレクションの中核をなすのは、チョサ・パサの初代会長であったプレーム・バハドゥル・カンサカル氏が所蔵していた写本の寄贈分である。これらの写本の収集は、プレーム・バハドゥル氏の父親アーシャーマン・シン・カンサカル氏の代から始められており、アーシャー・サフー・クティという名称も父親の名前にちなんで付けられたものである。

その後、プレーム・バハドゥル氏のコレクションに加え、何名かの人々から写本の寄贈を受け、開館時には古写本約5350点、貝葉写本約1070点の所蔵となった(タモット 1991: 6)。その他に約1100点の木の皮に記された土地払い下げに関する証書(これらも貝葉すなわちパーム・リーフと呼ばれる)も保管されている<sup>1)</sup>。

これらの写本は宗教別に分類すると、約40パーセントがヒンドゥー教系、35パーセントが仏教系、25パーセントが非宗教系と推定される。また言語別に見ればサンスクリット文献70パーセント、ネワール語(翻訳を含む)文献25パーセント、ネパール語、ヒンディー語、マイティリー語等の文献を合わせて5パーセントとなっている(タモット 1991: 6)(田中・吉崎 1998: 112)。カタログはチョサ・パサが出版したものと、日本のネワール仏教研究者吉崎一美氏が出版したものの2種があり、前者は約500点を選んでの説明付きカタログ、後者はほぼ全点を網羅したカタログである<sup>2)</sup>。

筆者は、2000年8月にアーシャー・サフー・クティを訪れる機会を得た。この古文書館は、カトマンドゥ市の繁華街タメル地区の南チェートラ・パティから旧王宮のあるダルバル・スクエアに向けて南下する途中、ナラ・デーヴィー寺院のはす向かいに位置する。この付近は商店や一般の民家が軒を連ねている地域である。中庭の四方を取り囲む建物の一角にアーシャー古文書館がある。



写真1: アーシャー古文書館

写真1は<sup>3)</sup>、アーシャー古文書館の

<sup>1)</sup> アーシャー古文書館配布のパンフレット(2000年8月入手)による。

<sup>2)</sup> 前者のカタログは、Janak Lal Vaidya and Prem Bahaduru Kamsakar, *A Descriptive Catalogue of Selected Manuscripts Preserved at the Āśā Saphū Kuthi (Āśā Archives)*, Cvasāpāsā, Kathmandu, 1991である。また後者は、Kazumi Yoshizaki, *A Catalogue of the Sanskrit and Newari Manuscripts in the Asha Archives (Asha Saphu Kuthi)*, Cvasā Pasa, Kathmandu, Nepal, Kurokami Library, Kumamoto, 1991である。

<sup>3)</sup> 写真1から3、5から7は2000年8月、写真4は1999年8月、写真8から11は2001年1月に筆者が撮影したものである。

ある建物である。古文書館の名称を示す黄色の看板がかかっており、中央に黒い大きなランジャナ (*rañjana*) 文字で *āsā saphū kuthi* と書かれ、その右上にはデーヴァナーガリー文字で同じ語が小さく書かれている。(田中・吉崎 1998: 100)によれば、ランジャナ文字は東インドのパラ朝 (750 A.D. 頃 ~ 1200 A.D. 頃) 後期に出現した装飾性の高いクティラ体の文字が、ネパールに入ってさらに装飾性を増したものとされ、仏典写本に多く用いられてきた文字である。この装飾文字は、現代でもこのような看板や書籍の表紙などに使用されている。

入り口を入るとすぐの急な階段を昇ると、2階に6畳間ほどの古文書館事務所があった。部屋の天井は低く、典型的なネワール家屋の一室である。当日は、主任図書館員のラージャ・サキャ氏と図書館員シャラド・カサ氏が従事していた。ラージャ・サキャ氏によれば、アーシャー古文書館が現在所蔵する写本の数は開館当初より増え、6000点ほどになっているということであった。



写真 2: 閲覧室のコンピューター

またアーシャー古文書館は、開設当初から日本のトヨタ財団の資金援助を受けていたが、現在はその銀行預金の利息や、依頼された写本のコピー代などを館の運営資金に当てている。1987年の開設当時には1ヶ月6000ルピー以上の経費がかかっていた(タモット 1991: 7)とのことだが、現在はもちろんそれ以上であろう。事務所内には写本は保管されておらず、仏教、ヒンドゥー教関連文献や伝記、小説などの書籍が書棚に並べられていた。

この建物の3階が閲覧室である。閲覧室は11~12畳ほどの大きさで、低いテーブルが部屋の両側に二列に並べて置かれてあり、そこで座って閲覧する。部屋の奥の棚に写本が陳列されている。中央のテーブルと入り口からみて右側のテーブルに1台ずつ計2台のコンピューターが置かれている。



写真 3: デジタル画像化された写本

アーシャー古文書館では、写本の保存のため以前から写本のマイクロフィルム撮影を進めてきた。実際にマイクロフィルム化を行なったのは、仏教資料文庫である。仏教資料文庫は、名古屋市天白区の曹洞宗寺院徳林寺住職の高岡秀暢氏が中心となり、ボランティアの人々とネワール仏教文化の保全のため活動している

その活動拠点である。すでに写本コレクションのある部分はマイクロフィルム化が済んでいるが、近年写本のデジタル画像化を計画し、2年ほど前から写本のスキャニングを始めた。2000年5月にCD-ROM化が完成し、現在それを利用して閲覧できるようになった。

カタログのデータベースはまだ完成していないので、写本の画像を閲覧するためにはカタログから希望の写本を選んで、申請用紙に写本番号、題名などを記入する。それをもとに、図書館員のシャラド氏が検索する(写真2,3)。閲覧にかかる費用は、1時間につきネパール人は20ルピー(2001年3月現在のレートで約30円)、外国人は40ルピーである。またコピーを頼む場合には、1ページごとにネパール人20ルピー(ただしチョサ・パサのメンバーは10ルピー)、外国人は40ルピーである。

筆者は、1994年にもアーシャー古文書館を訪れ写本のコピーを依頼したが、当時マイクロフィルム化されていない写本は直接ゼロックスコピーを取っており、破損や紙質の悪化が心配された。主任のラージャ・サキャ氏も「現在はCD化が完成し、破損の心配がいらなくなった」と述べていたが、現在はそのかわりに印刷代が高くなっており、特にネパール人にとっては入手しづらくなったように思われる。

### 3 ネワール仏教僧所蔵の写本

先にも述べたように、ネワール仏教僧たちが個人で所蔵する写本も多い。筆者は2000年8月ネワール仏教僧の自宅を訪れた際、その家で所蔵している写本を数点見せてもらう機会を得た。筆者が訪れたのは、以前から密教儀礼のインフォーマントであった故ラトナカジ・ヴァジュラーチャールヤ氏の自宅であった。ラトナカジ氏はカトマンドゥ市の中心街アサン地区のマントラシッディ・マハーヴィハール寺院のグティ(講の一種)に属するネワール仏教僧である。

氏はサンスクリットや密教儀礼の知識が豊富であり、サンスクリットやネワール語のテキスト類、カトマンドゥ盆地内の仏塔に関する著作を数多くなされている典型的な学問僧であったが、1999年10月67才で死去された。現在は息子たちが儀礼をとり行なうブジャリである同時に、長男、次男がマンガラや仏画を描く画家、また六男がネワール仏教の伝統的な舞踊チャルヤー・ダンスの踊り手としても活躍している一家である。

カトマンドゥ市北西部の仏教寺院スワヤンブー・ナート寺院の付近にあるディメロン地区に一家の自宅がある。次男ガウタム・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏によれば、この一家で所蔵しているサンスクリット、ネワール語写本は現在300点にのぼり、そのうちの多くが儀礼の際使用されてきた写本であるという。

ネワール仏教がインド仏教から取り入れた仏典の種類は多岐にわたり、日本仏教でもなじみの深い『般若経』や『法華経』などの大乘仏教経典の写本も多い。これらの経典は現在でも読誦の目的で使用される。1999年、ネワール仏教徒にとって最も聖なる一ヶ月間である「グンラー・ダルマ」*Guṇlā Dharma*(7-8月)の期間、カトマンドゥ

市に隣接するパタン市の仏教寺院クワ・バハ（ゴールデン・テンプル）で、筆者はその寺のグティに属する僧侶たちが、12世紀のものとされる『八千頌般若経』のニーラパトラ写本（紙を紺色のインクで染め、金の絵の具で文字を書いた写本）を読誦しているのを目にした（写真4）。

ネパール仏教の写本には、その他に仏伝などもあるが、密教経典とりわけ儀礼の手順を述べたマニュアル、すなわち儀軌(vidhi)の写本が多く残されている。密教(仏教タントリズム)においては、初期仏教が関心を持たなかった儀礼がさかんに行なわれるようになった。密教儀礼においては、仏や神々に供物を捧げ礼拝する供養(プージャー)や護摩(ホーマ)の中に、密教の観想法(行者が仏や神々のイメージを瞑想し、時にはそれらと一体化しようとする修行法)が内的、精神的要素として含まれている。



写真4: グンラー・ダルマの際の写本の読誦

インド密教の伝統を受け継ぐネパール仏教においてもそのような儀軌が多く書写された。インドで仏教が滅び、ネパール仏教が自身のローカル・テキストを作るようになってからは、仏教思想の体系よりも儀礼を重視する傾向と相まって、非常に多くの儀軌が作られるようになった。現存する写本には、このような儀礼のテキストであると同時に観想法のテキストでもあるローカル・テキストがかなりの割合を占めている。しかしながらネパール仏教においては、密教的ヨーガとしての観想法の伝統はすでに途絶えてしまっており、これらのテキストはもっぱら供養や護摩のマニュアルとしてのみ用いられている。

写真5は、ラトナカジ・ヴァジュラーチャーラヤ家が所蔵する『アモーガパーシャ・サマーディ』*Amoghapāśasamādhi*（不空羂索観音三昧）と題する紙写本である（書写年不明）。この写本は前述のような観音の供養と観想法のテキストである。ネパール仏教のローカル・テキストには「サマーディ」(samādhi, 三昧)、「デグリ」(deguli, samādhiのネパール語訳)、「ヴィディ」(vidhi, 儀軌)、「ムカーキヤーナ」(mukhākhyāna, 口伝)などの名称を持つものが多いが、このテキストもその1つである。



写真5: 『アモーガパーシャ・サマーディ』

「ティヤサフー」と呼ばれる折り本の形式をとっており、横約 20 センチメートル、縦約 10 センチメートルに折りたたまれている。儀礼に使用された際に水にぬれたのか、所々インクが滲んでおり破損もはげしい。写本を見せてくれたガウタム・ラトナ氏によれば、この写本はブジモール (bhujimol) 文字で書かれているという。ブジモール文字は 11 世紀頃から流行しはじめた頭部を丸めた装飾字体であるが、この写本の文字はそのような形をしておらず、むしろ装飾性の少ないプラチャリタ・ネワール (pracalita newari) 文字と考えられる。なお写本右端のページ数は、後になってペンで書き加えたものである。

写本の各ページには儀礼の手順 (例えば「花を供える」とか「印を結んで真言を唱える」といった説明) と真言が記されているが、大部分がサンスクリットであり、ごくわずかに手順の説明部分がネワール語で記されている。文字の他には白描の印相図が描かれ、その下に印の名称 (写真 5 の印は vajrāṅkuśamudrā, 金剛鉤印) がサンスクリットで記されている<sup>4)</sup>。

写真 6 は『ダーラニー・サングラハ』*Dhāraṇīsamgraha* (陀羅尼集) の紙写本 (書写年ネワール暦 948 年、西暦 1828 年) である。紙面は黄褐色であり、ハリターラ (防腐防虫のために塗布する雄黄 = 硫化砒素<sup>5)</sup>) を塗ったいわゆるハリターラ写本である。写本 5 の折り本よりやや小振りの大きさである。文殊菩薩、観音、ガネーシャ神などの諸尊のダーラニー (呪文の一種) がプラチャリタ・ネワール文字で記されている。



写真 6: 『ダーラニー・サングラハ』

各ダーラニーの初めの部分 (om namo で始まる部分) には、見分けが付きやすいように文字の上が赤く塗られ、またその上に赤いインクでマークが付けられている。また初めの部分があるページの中央には、その尊格の図像が彩色で描かれている (写真 6 は聖観音の図像)。この写本にはダーラニーのみが記され、儀礼の手順は書かれていない。したがって儀礼の手順の説明に使用されるネワール語は記されず、サンスクリットのみである。また読誦する場合に各葉の表を読んだ後、裏返して裏面を読むので、表と裏の文字の向きは逆さになっている。写真 5 の写本に比べて比較的保存状態が良い。

<sup>4)</sup> 初期・中期密教 (ヨーガ・タントラ) 系の尊格を観想する際には印を結びながら行なうのが一般的であり、初期・中期密教の観想法儀軌には多くの印相図が描かれる。一方後期密教 (無上ヨーガ・タントラ) の観想法では印を結ぶ行為が重視されず、したがってこれらの写本にも印相図はあまり描かれない。

<sup>5)</sup> (田中・吉崎 1998: 97)

写真7は『アーチャールヤ・プージャー・クリヤー・サングラハ』*Ācārya-pūjākriyāsaṅgraha* と呼ばれる儀軌(書写年ネワール暦984年、西暦1864年)である。これは、縦約13センチメートル、横40センチメートルの比較的大ぶりの写本である。各葉の中段に文字の書かれていない2つの箇所があり、そこにとじ糸を通す穴が開けられている。各葉の裏面のみが黄褐色をしており、裏面のみ虫除けの雄黄が塗られた可能性がある。



写真7: 『アーチャールヤ・プージャー・クリヤー・サングラハ』

第2葉に記された目次には、「アンナ・プラーサナ」(annaprāsana, お食い初め)や「カイター・ビエー」(kayatā biye) と呼ばれる、男の子を剃髪し僧衣を与える仏教僧への入門式などの通過儀礼、「ピータ・プージャー」(pīṭhapūjā, 聖地供養)「ナーガ・プージャー」(nāgapūjā, 蛇神供養)などの儀礼が全部で77挙げられている。

プラチャリタ・ネワール文字を用い、儀礼の手順の説明はネワール語、真言はサンスクリットで記されている。サンスクリット真言と区別するために、ネワール語の説明文の上は赤く塗られている。ネワール語の部分が赤く塗られるのは、ネワール仏教写本では一般的な形態である。この写本の後半部分は、前半部分の筆跡とは異なるが、同じ年代に異なった複数の人物が書写したのか、どちらかの部分を後から書き直したのかは明らかでない。ちなみに書写年代は、写本の最後の奥書に記されていた。またこの写本は、前2点の写本とは異なり印相も尊格の姿も描かれていない。

ネワール仏教僧の自宅に保存されている写本について述べてきた。これらは、すべて儀礼の際使用されてきた儀軌であり、使用の頻度によってはかなり破損したものも見受けられた。またこれらの写本は原則として一般信者には公開されず、僧侶の家庭で父から子へと伝えられてきた。カトマンドゥ盆地のネワール仏教僧の家庭には、現在でもかなりの数の写本が保存されていると推測される。しかしながら、仏教僧全体のサンスクリットの知識が乏しくなり、ネワール仏教が力を失いつつある現状で、保存プロジェクトの枠内には入れられないこのような写本が今後無事に保存されていくかどうかは疑問が残る。

#### 4 ネワール仏教儀軌類の版本

近年、ネワール仏教僧たちによってサンスクリットやネワール語の儀礼テキストの印刷本が作られるようになった。この動きは1970年代初頭から始まったが(田中・吉崎1998:127)現在でも儀軌類の新たな版本が出版され続けている。一般にネワールの人々は、出版に関して熱意を持っているように思われる。1768年にゴルカ族の王朝がカトマンドゥ盆地を支配した後、特にラナ政権下ではネワール語出版の禁止令が出されていた。この政権は1950年に崩壊し禁止令も解除され、その後ネワールの人々は堰を切ったようにネワール語による出版を始めたという。ネワール仏教僧たちによる儀軌の出版も、このような状況を背景にしていると考えられる。もちろん印刷技術が発達、普及したことも大きな原因である。



写真 8: ネワール仏教儀軌類の版本

写真8はそのような儀軌の版本である。上段左から右、下段左から右の順に、これらの版本の編著者、題名、出版者(出版団体)、出版年等を以下に示す。

編著者名	題名	出版者 (出版団体)	出版地	出版年
1) Ratnakaji Vajrā-cārya	<i>Kalaśārcanapūjāvidhi</i>	Vikās Ratna Vajrācārya	Kathmandu	1988
2) Ratnakaji Vajrā-cārya	<i>Kalaśārcanapūjāvidhi</i>	Śrī Yogambara Prakāśan	Kathmandu	1994 1)の改訂版
3) Ratnakaji Vajrā-cārya	<i>Balipūjāyā Yathārthatā</i>	Vajrācārya Prakāśan	Kathmandu	1993
4) Ratnakaji Vajrā-cārya	<i>Mokṣagāṃ Utpatīyā Bākhem (Upośadabratayā Upadeśa)</i>	Nānīchorī Vajrācārya	Kathmandu	1995
5) Herākāji Vajrā-cārya	<i>Gurumaṇḍalārcana pūjāvidhi Pusutaka</i>	Bekhārāja Vajrācārya	Patan	1993
6) Āśākāji Vajrā-cārya	<i>Gurumaṇḍalārcana Pusutakam</i>	記載無し	Patan	1989
7) Āśākāji Vajrā-cārya	<i>Tārā Pārā Jikā</i>	記載無し	Patan	1986



- 8) Badrī Ratna Va- *Śrī Durgati Parisodhana* Bāburatana Tu- Kathmandu 1988  
jrācārya *Samādhi* lādhar 他

ネワール仏教徒は、マッラ王朝下で14世紀カースト制を受け入れ現在にいたる。ネワール仏教徒社会において、僧侶カーストが一番上の階層とされ、彼らは「ヴァジュラーチャールヤ」「シャーキャ」という名字を持つ。ネワール仏教儀軌の版本は、このような仏教僧のカーストの中でも主に職業僧の身分であるヴァジュラーチャールヤの人々によって出版されている。

ネワール仏教儀礼において、基本的あるいは重要と見なされる儀礼のテキストは複数の人々によって出版されている。「グルマンダラ・プージャー」(gurumaṇḍalapūjā 師曼荼羅供養)は、ネワール仏教では最も基本的な供養でありすべての儀礼の一番始めに行なわれるが、この供養の儀軌は複数のヴァジュラーチャールヤたちによって出版されている。写真8の版本の中でも、5)と6)がグルマンダラ・プージャーの儀軌であり、1)および2)にもこの儀礼の儀軌が含まれている。

これらの儀軌は、一般向けに書店に並ぶのではなく、ほとんどが無償で僧侶たちに配布される。したがって値段が付けられているものはほとんど無いが、中には「お布施(dakṣiṇā) ルピー」というスタンプが押されているものもある。印刷代は多くの場合「ジャジマーン」(祭主、儀礼の依頼人)と呼ばれる檀信徒が支払う。通常一つの版本につき1000部印刷され、ヴァジュラーチャールヤたちに無料で配布される。



写真9:『カラシャ・アルチャナ・プージャー・ヴィディ』

写真8の版本1)から4)の編著者であり、前節で述べた写本を所蔵していたラトナカジ・ヴァジュラーチャールヤ氏の次男ガウタム・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏によれば、1994年に2)の版本を出版したときには、1000部印刷して60,000ルピーの経費がかかったとのことである。これらの版本の本文は、デーヴァナーガリー文字で印刷されている(写真8の版本1)の著者名、2)の題名と著者名はランジャナ文字である)。写本の場合と同様に、儀礼行為の説明部分はネワール語で記され、真言や祈願文はサンスクリットで記述される。

写真9は版本2)の一部である。この版本では、ネワール語の説明文を小さなデーヴァナーガリー文字で、サンスクリットを大きな太字で印刷し、ネワール語の文に下線を引いてサンスクリット真言と区別しやすいようにしている。儀礼を行なう際僧侶が結ぶ印相図も白描で示されている。以上のような版本の中には、一つの写本を見てそのままデーヴァナーガリーに書き写したと思われるものもあれば、2、3の写本を参

照して校訂し、各ページの下にヴァリエーションを付けているものもある。

このような冊子の形状以外に、写本の形に倣った版本も作られている。写真10は、写本の形状をした版本の表紙である。これは版本1)から4)の編著者ラトナカジ・ヴァジュラーチャールヤ氏の著作であり、氏が亡くなって一年後の2000年に出版された遺作である。折り本ではなく、縦約11センチメートル、横約27センチメートルの洋紙を76枚重ね、表と裏表紙に赤い厚紙をつけている。表紙は赤い色に金色の文字が記されており、一番上段にプラ



写真10: 『七種無上供養儀軌』表紙

チャリタ・ネワール文字で namo ratnatrayāya ( [仏法僧の] 三宝に帰依する ) というサンスクリットの敬礼文が書かれている。二段目は大きなランジャナ文字で saptavidhānuttara pūjāvidhi<sup>6)</sup> (通常「七種無上供養」と訳される) という題名が、三段目は再びプラチャリタ・ネワール文字で tārāsanā, bhadracarī, aṣṭamaṅgalagāthā va dānagāthā arthasahīta (意味を添えたターラー女神讃歌、パドラチャリ、八吉祥歌、進物儀礼歌) と記されている。最下段には、デーヴァナーガリー文字で再び saptavidhānuttara pūjāvidhi と題名が記されている。この版本はインド密教儀軌にもしばしば述べられ、現在のネワール仏教でも重要な儀礼の一つである七種無上供養をメインに、ターラー女神への讃歌、普賢菩薩(サマンタパドラ)の供養、八吉祥(8つの吉祥な印)への讃歌等が述べられている。

中のテキスト(写真11)は、黄色の紙の両面に黒いデーヴァナーガリー文字で印刷されている。黄色い紙が使われているのは、ハリターリカー写本を模したためであろう。儀礼の手順や讃歌の意味などを示すネワール語部分は小さい文字で、真言や讃歌本文を記すサンスクリットは大きな文字で印刷されており、表の面と裏面の文字は逆向きである。ガウタム・ラトナ氏によれば、これは500部印刷され、ヴァジュラーチャールヤたちに配布されることだが、出版費用は檀信徒が出したのでいくらかかったかは不明である。先に述べ



写真11: 『七種無上供養儀軌』紙面

<sup>6)</sup> 古典サンスクリットでは、連声の法則で saptavidhānottara-となるべきであるが、ここでは -vidhānuttara-となっている。

た冊子の版本と比べると写本形の版本は紙質も、印刷状態もかなり良好である。

カトマンドゥ市には、「アーチャールヤ・グティ」と呼ばれる主要な18の寺院のヴァジュラーチャールヤたちが属する組織がある。パタンや今ひとつの町バクタプールには、そのような組織は存在しない。アーチャールヤ・グティは檀信徒の保護、儀式的の取り決めなどにたずさわっているが、ヴァジュラーチャールヤたちはこのグティのメンバーに儀軌を配布する役目を負っている。このためカトマンドゥ市ではパタン市などより、儀式の手順が一定している（Locke 1985: 256）。今まで述べてきた儀軌の版本の配布は、少なくともカトマンドゥ市内においては、儀式の次第のある程度の統一やヴァジュラーチャールヤの連帯感を生むために役立っていると言っていることができる。

## 5 結び

本報告では、アーシャー古文書館における写本保存の動向、ネワール仏教僧個人が保管する写本、および仏教僧らにより出版される儀軌の版本について述べてきた。ヒンドゥー教を国教とするネパールにおいて、現在ネワール仏教は大きな勢力を持っているということとはできない。また、1900年代半ば以降カトマンドゥ盆地に亡命してきたチベット仏教徒たちの僧侶の組織力およびその檀信徒たちの経済力を、ネワール仏教徒のそれらと比較するならば、後者の力は前者とは比較にならない程乏しい。

そのような状況のもとで、サンスクリットの伝統を翻訳を通さずインドから直接受け継ぎ写本を多数保有しているという事実は、ネワール仏教徒、特に仏教僧たちの誇りであり自身の拠り所となっている。またそのような写本をもとにして儀軌類の版本を出版することは、儀礼を重視するネワール仏教という伝統宗教の担い手としての仏教僧のアイデンティティーを示してゆく一つの手段となっている。

しかしながら、現在ではサンスクリットや儀礼の知識を豊富に供え、自ら儀軌を出版してきた仏教僧たちはすでに亡くなってしまっているか、かなりの老齢に達している。ネワール仏教の伝統を守ってゆく若手の後継者が育っているとも言いがたく、若者たちは収入の少ない職業僧ではなく、より収入の多い他の職を求めている。

若手の人材不足に加えて、ネワール仏教徒の経済力も問題である。以上に述べたような儀軌は商業出版ではなく、もっぱら檀信徒の布施という形をとるので、檀信徒が今後何万ルピーも出版費用を捻出できるかという不安もある。また写本の保存に関しても、保存プロジェクトのほとんどをドイツや日本の経済支援に頼らなければならぬのが現実である。

このような現状で、将来ネワール仏教がカトマンドゥ盆地において、伝統宗教としての地位を保ち続けることができるのか、あるいは衰退し消滅してしまうのかどうかは、今判断することは困難である。また、最近ネパール国立トリブヴァン大学に仏教学科が設置されたという話も聞いた。このような公的教育機関でサンスクリットや仏教教義を学んだネワール仏教徒の若者が、将来ネワール仏教に対して何らかの寄与をなし得るのか、そしてそれが写本その他の保存をネパールが自力で行ない、儀軌を含

めた仏教文献の新たな出版などを盛んにする結果を生むのかどうかという点に関しては、今後しばらく状況を観察していかなければならない。

< 文献 >

田中公明

1990 「ネパールのサンスクリット語仏教文献研究(1) — 写本保存プロジェクトと研究の現状」 『印度學佛教學研究』 39-1, 381-385.

田中公明・吉崎一美

1998 『ネパール仏教』 春秋社.

タモット, カーシーナート

1991 「“希望古文書館”の現状と展望」(吉崎一美訳), *A Catalogue of the Sanskrit and Newari Manuscripts in the Asha Archives (Asha Saphu Kuthi), Cwasa Pasa, Kathmandu, Nepal*, (Compiled by Kazumi Yoshizaki) Kurokami Library, Kumamoto.

Locke, John K.

1985 *Buddhist Monasteries of Nepal*, Sahayogi Press, Kathmandu.